

## ヴィーナスの足先

中村祥二 (会長)

1964年春、パリ・ルーヴル美術館から、ミロのヴィーナス (Vénus de Milo) が来日した。

ミロのヴィーナスは、1820年4月8日、エーゲ海南西部に位置する現ギリシャ領 (当時オスマントルク領) のミノス島で小作農により発見された。ルーヴル美術館入りをして以降、現在までミロのヴィーナスが美術館を出て海外に渡ったのは、1964年の日本行きのみで一度だけだという。

ヴィーナスは、発見された日と同じ日の4月8日から、国立西洋美術館の前庭に作られた特設会場で公開された。美術館には、どこまでも続く列に沿って最後尾を探しに探して並び、それから何時間も待った覚えがある。家族で待っている間に、頼んでおいた品物を新宿までとりにいって来られるなどと思った記憶があるほど、それは長い行列だった。会期38日間の入場者数は83万人をこえた。

目指すヴィーナスは、柵に囲まれた高い台座の上に、やわらかな照明に照らされて、美しく立っていた。この像の名前や写真や、発掘の数奇なエピソードを知ったのは中学生の頃だったろうか。歴史的な傑作として頭に染みついでいて、遠くから人の頭越しに見た、均整のとれた崇高とも思える美しい姿に感激した、その時の姿は今でも頭に残っている。

1969年パリのルーヴル美術館で再会した。広い展示場の中央の私の胸の高さくらいの台座にさりげなく立っていた。朝のルーヴル美術館の入館者はそれほど多くはなかったが、さすがにこの名作の周りには、ちらほら人が集まっていた。まず、見学者とヴィーナスを隔てるものは何もなく、ゆったり鑑賞で



ミロのヴィーナス

きる雰囲気には驚いた。次にびっくりしたのは、大理石のヴィーナスの白いはずの足先が黒く汚れていることだった。特に親指は黒光りするほどだった。美しい女神の足先に触れていく人も多いのだ。こんなことがあってよいものだろうか。特別なもの。美しいものに触れたい、親しみを肌で感じたいという気持ちがあるのだろうか。それともヴィーナスと握手していくつもりなのだろうか。私は触らなかった。美術品は触ってはいけないものだという意識がいつの間にか身に付いていて触れなかったのだ。窮屈な感じがするがすぐには切り替えられない。周りを見

ると、警備員が見張っているが見咎める様子はない。赤い顔をして朝から赤ブドウ酒くさい息をしているから、貴重な美術品に人が触れるのに気づかないのか、それとも身の回りに優れた芸術品が溢れるようなあるフランスの芸術に対するおおらかさの表れなのか。

日本人はこのヴィーナス像に、女神としての美しさがもちろん、気高さや崇高さを感じるらしい。肩幅も広く堂々たる体躯で、日常身近に見る女性はかけ離れているから、非日常の美しさとして捉えられるのだろう。しかしヨーロッパの人にとって、ヴィーナスほどの均整が取れていないにしても、このようながっしりしたからだつきの女性は、常日頃身の回りにはいるはずだ。豊穡と多産の願いが込められているヴィーナスの失われた右手は腰の布を押さえているという説が有力だし、羞じらいを含んでいるようにも思える姿には、エロチシズムを感じる人も多いと聞く。触れてみたいというか、思わず触れてしまうような気持ちになるのかもしれない。

ニューヨークのメトロポリタン美術館では、こうはいかないだろう。事実、美術館に対するヨーロッパとアメリカの感覚にはかなりの違いがある。メトロポリタン美術館の絵画には前面にガラスの入っているものが多い。見る角度によっては照明の反射で見にくいことがあるが、光やホコリ、そのほか絵画を傷つけるものから守る意図があるのがわかる。

ルーヴル美術館は前面にガラスの入った絵画が増えてきたが、以前はモナリザなどの特別な作品に限られていた。1977年頃3回目に出会ったとき、ヴィーナスの足先は大理石の白い輝きを取り戻していて、誰も触れることができないようになっていた。人類の遺産である芸術品の保護が、注意深く行われるようになってきたことは歓迎であるが、ヴィーナスの足先に触れることが出来なくなったのはちょっと残念な気がする。